

随 想

イギリスで災害について考えたこと

京都大学防災研究所 奥 西 一 夫

1. はじめに

私は昭和61年12月から英国に8ヶ月、アメリカに2ヶ月、文部省在外研究員として滞在し、日頃の忙しさから解放されて、少しのんびりできたので、その時に考えたことを書いて見たい。在外研究のテーマは実験地形学の進めかたについてであったが、商売柄、災害、特に山地災害に関連して、いろいろな実験地を訪問し、データを借りて、若干の解析をおこなったりした。アメリカでは海岸山脈やカスケード山脈を中心にあちこちを見てまわったが、災害に関しては日本のそれとあまり変わった印象は受けなかった。しかし、イギリスの災害事情は日本と大変違って驚いた。

イギリスに出発する前に、イギリスには災害はあるのかと、多くの人から聞かれた。自分でもそういうことを感じていたので、イギリスの自然災害を研究しに行くとは決して言わなかった。しかし、イギリスにも災害は多かったし、それ以上に災害に関する基本的な認識について、考えさせられることが多かった。

2. 災害の認識について

災害は社会的な現象である。また社会条件の変化に伴って災害の起こりかたは変化(進化)して行く。このことは頭では充分理解していた筈であった。しかし、自然条件と社会条件がかなり異なる国で生活して見ると、災害というものの認識がまるで違うことを実感して強いショックを受けた。私の滞在中にイギリスで起きた二つの大きな災害は1987年1月の寒波と同年4月のオランダ沖でのフェリー転覆事故であった。前者は、あまり気温が下がらなかった地方でむしろ大きな被害がでたことについて議論したいこともあるが、日本の豪雪災害にも似たような側面があり、そのことにつ

いてはわが国でもすでに議論されているので、ここでは割愛する。後者については、「日本ではこんなものは災害とは呼ばない」と周りの人に議論を吹っ掛けてみたが、「日本には火山や地震が多いからね」とかわされて、議論は噛み合わず、あとでひとりで考えた。この「事故」はフェリーの車両ゲートを開けたまま出航して、急カーブを切ったために海水が入って転覆(私は荷くずれの可能性も大きいと思う)したというもので、自然災害的な要因はまったくない。だから、どう考えてもそれは自然災害ではあり得ない。しかし、日常的な Disaster をいろいろ見聞するうち、このフェリー事故はやはり災害であると思うようになってしまった。

われわれ日本人は、自然的、人為的な諸現象を原因別に分類し、そのつぎにそれぞれの現象が引き起こす社会的な問題を考えて、これは災害であるとか、ないとかを判断する癖があるようである。だから、研究者も、災害の原因となった現象については議論しても、災害そのものについては議論しないことがしばしばある。そして、「山崩れという災害は……」というような表現がまかり通ったりする。これはもちろん、「山崩れによる災害」とか、「災害の原因としての山崩れ」の省略形であるが、こういう言葉を交わしているうちに、山崩れイコール災害というような感覚になってしまっているのではないだろうか。イギリス人は災害の原因を考える前に被害について十分議論をする。もちろん災害は社会的現象であるという認識は我々と共通だから、個人的被害は災害には入れない(日常会話では Disaster という言葉はかなり茶化したような意味で使われる。たとえば幼児が茶碗をひっくり返すと Disaster である。但し大人がひっくり返した時は責任の所在が明確だから、そう

は言わない)。イギリスでは保険が発達しており、くだんのフェリー事故の時も多額の保険金が支払われたようである。保険は災害の経済的な側面の多くを個人的に解決し得るものにしたが、人命の損失や生き残った人達の精神的苦痛を直接的に解決することはできない。そのような被害が社会的に問題にすべきレベルである時、イギリス人はこの事態を災害と呼ぶようである。

人命の尊重ということは、どの国でも重要視される事柄であるが、現実の社会活動において、そのことにどれだけのエネルギーとお金をかけることができるかということになると、国情の違いがかなり露骨に出てくる。極端な例を挙げると、飢餓に苦しんでいるアフリカ諸国では、水害や地震・火山災害に対して社会的な対策をおこなうことは困難である。また今日の食糧をなんとかするために、明日の土地荒廃を確実にもたらすような過放牧をも黙認せざるを得ない。逆に、豊かな社会ほど、人命の保全に対して細かな配慮をすることができる。だからイギリスでは我々がたいしたことではないと思うようなことを災害だと言って大騒ぎすることが時々ある。逆に、自分の安全は自分で確保しろと言わんばかりに、不親切に感じることもある。

3. 災害対策について

イギリス人の自然観について、まだ完全に理解するには至っていないが、彼等が自然を大事にすることは想像以上であった。日本の自然破壊のすさまじさを振り返って、あまりにも恥ずかしかったので、イギリスの人とはその点についてほとんど議論をしなかったが、生きるために自然を改変・破壊することと、望ましい環境をまもるために、自然を保護することの間にはイギリスでも深刻な相剋があるようである。だから、何らかの開発計画が持ち上がると必ず大騒ぎになる。エクセター近郊の高速道路のそばには石碑が建っていて、「環境庁の某と国会議員の某は高速道路を通すために、美しい村をひとつ破壊した。我々はそれを阻止出来なかったが、次の世代の人達はこんな馬鹿なことはしないほしい」と激しい調子で記されている。このように、開発側と自然保護派の間

の対立はかなり激しく、流血事件さえも起こるが、卑怯なことを決してしない点が日本と大違いである。公共用地の利用に関しては、ここまでなくてもと思えるほど、自然が大事にされる。土地に不自由していないということもあるが、やはり自然観が違う。自然の中でのリクレーションの楽しみかたもまるで違う。

こういう自然観の違いは、当然災害対策の考えかたにも現れてくる。日本人は美しい自然だけを保護しようとするが、イギリス人は人間にとって不都合であっても自然は大事であると考え。だから、よほどせっぱ詰まらないと防災工事の類はやらない。もちろん、利害は人によって違うから論争はよく起こる。しかし、社会全体としては防災工事には驚くほど消極的である。したがって、災害対策は危ない所に行かない、危ない所に住まないということに尽きる。そういうことは基本的には各自が判断すべきことであるが、正しい情報を住民に提供することと、安全教育をおこなうことは行政の責任である。皮相的に見ると、イギリス人はちょっとしたことで災害だ災害だと大騒ぎするが、騒ぐだけで何もしないようにも見える。自然条件があまりシビアでないからそれで済むという側面もあるが、それぞれが自分勝手なことを言い合っている内にだんだんと問題の本質が見えてくる。こういう形で問題を処理してゆくのがイギリス流というものかも知れない。

このような自然観、災害対策観は必ずしも昔から確立されていたようには思えない。産業革命の頃は、かなり安全性を欠く土地利用もおこなわれ、その影響が今も尾を引いている事例もある。小河川の氾濫は日本より頻繁に起こっているのではないかと思うが、河川沿いの低地は普通は牧場に利用されているので、氾濫は災害にならない。しかし、場所によってはそういう低地に住宅や工場が建っていたりする。また、地方道は昔のままで、河川が氾濫するとたちまち冠水し、交通止めとなる。もっともイギリス人の大多数は1年に何回かの交通止めや毎日の渋滞のことをぼやきつつも、それよりも石橋のある狭い田舎道の風情を大事にしているようである。

前節で人命尊重のことを書いたが、イギリス人

と日本人では人命尊重の考えかたに微妙な差がある。海外雄飛の時代はとくに過ぎたとは言え、イギリス人の冒険好きはおそらく今も変わっていない。無知のために命を落とすことと、意義のある冒険をすることは別であることを皆が知っているから、人々に災害の危険を教える場合も、情報を詳しく提供するが、ああしろとか、こうしてはいけなとかは決して言わない。イギリスには海岸地すべりが多く、イギリス人の大好きな散歩道が壊れることが最大の災害であるが、本当に危なくなるまでは立ち入り禁止にはせず、詳しい情報を記した立札が建てられる。こういうのを見るとイギリスはやはり大人の国だなと感じる。100年ほど前にイギリスで起きた自然災害や公害のレポートを読むと、技術的な内容はさすがに古臭く感じるが、社会的な側面、特に被害者と責任者の間のやりとりの様子などは、今の日本とあまりにも似ていて驚く。やはり日本は社会的にはまだ100年遅れているのだろうか。

4. あとがき

余談であるが、*natural disaster* という言葉は一般の人には奇異な言葉に聞こえるのであろう。研究者・技術者と話をする時は *natural disaster* と言っても全く問題はないが、私はうっかり下宿の主人に *natural disaster* を研究していると言って失敗した。その話がたちまち親戚や御近所にひろまり、だれかに出会うたびに *natural disaster* という言葉が入ったジョークを言われたからである。思うに、*disaster* という言葉の中には何か *unnatural* というような意味あいが含まれているようで、上記の茶碗がひっくり返ったら *disaster* だというのも、このことに関係しているように思われる。

【編集委員からのお願い】

世界の各国、あるいは国内各地方でのいろいろな時代における“災害観”あるいはその変遷について、見聞されたことのご投稿をお願いします。

また「地震、雷、火事、おやじ」に何故洪水や暴風雨が入らなかったか、ご存知の方は教え下さい。